

初等教育課程教員及び保育士養成校における ピアノ実技指導に関する一考察

鈴木 由美子

Consideration relating to the piano practical guidance
at the training school of primary teachers and nurse.

Yumiko SUZUKI

初等教育課程教員及び保育士になることを夢見て入学してくる学生の中には、ピアノの初学者がいる。短期大学の2年間、授業数でいうと1年次28コマ（千葉敬愛短期大学では、授業コマ数は30であるが、そのうち2コマは前期実技試験、後期実技試験の時間とされるため）、2年次28コマ（上記同様）、計56コマ（個人詳細は後述）となる。その与えられた時間の中で、初学者から、自立した音楽技能を持つ教育者、保育者に育てるためにどうしたらよいか模索していた。今回、担当した平成26年度器楽Ⅰ（1年生クラス）において、この演習授業の目的をどこに設定し、どのように授業計画を立てて実行したか、学生自身に実感できる成果をあげるためにどのような工夫をしたか、今後のための改善点はどこか、平成26年度器楽Ⅰの授業記録（鈴木クラス）を基に考察する。

<キーワード>

ピアノ、音楽教育、弾き歌い

はじめに

初等教育課程教員及び保育士を志す学生が、その養成校において必ず学び、身に着けなければならない技能の一つに、「ピアノ実技」、「弾き歌い」がある。それぞれの養成校において名称は異なっても、「現場」で必要かつ重要な音楽技能として認識され、多くの養成校において1年次は必修科目、2年次になると必修科目或いは選択科目、または保育技能の1科目として重きを置かれている。

しかし、養成校に入学してくる学生の多くが、「ピアノ実技」「弾き歌い」については初学者であることが多い。初学者であるということは、ピアノの演奏技術だけでなく、「楽譜を読む」ことから学ばなければならない。これは、国語においての文字から学ぶことと同じことと思う。

楽譜に何が書かれているか理解し、それからピアノ演奏のための技術を学び、それと並行

して「歌う」ことを学ぶ。その上で、最終的には「弾きながら歌う＝弾き歌い」「子ども達に歌い出しを促す」「初めての歌を教える方法」等の「教育及び保育現場に必要なピアノ実技と弾き歌い技術」を学ぶ。

千葉敬愛短期大学の器楽の授業数は、1年次28コマ（授業コマ数は30であるが、そのうち2コマは前期実技試験，後期実技試験の時間とされるため），2年次28コマ（上記同様），計56コマである。時間で換算すると90分授業の中で6～8人を指導していくので，学生一人当たり概ね10～14，5分になる。1年間で，単純に考えると10分の場合は280分（約4.7時間），14分の場合は392分（約6.5時間），15分の場合は420分（約7時間）となる。

「現場に必要なピアノ実技と弾き歌い技術」を伝えるために，このレッスン時間が短いのか適当であるのかは何とも言えない。非常勤である私の立場からは，与えられた時間の中で，この内容を学生に如何にして伝えていくかが重要で，その方法を考える必要があった。

尚，少し大雑把な括りではあるが，ここでは，初学者とは，入学してから初めてピアノに触れる学生と入学が決まってからレッスンに通い始めた学生を含んでいる（個人，グループレッスン含む）。経験者とは，修得期間に関わらずそれ以外のレッスン経験者を指すこととした。

1. ピアノ実技指導に入る前に留意したこと

学生の意識を変えるために働きかける。

まず，養成校で学ぶピアノ実技は，「教育現場，保育現場に必要な技能」であるから，「趣味のピアノではない」こと，また「弾き歌いの技術は，養成校独自の保育技能として学ぶ技術」ということを徹底して伝えた。初学者も経験者も，どちらが優位というのではなく，一から新しいことを共に学ぶという姿勢を持たせるように授業の中で何度も繰り返し試みた。

学生たちの中で，初学者と経験者という違いは，初学者にとって不安と強い緊張をもたらした。経験者にとっては，緊張はあったものの初学者よりも幾分慣れと自信となって表れた。

この言葉によるピアノ実技授業の位置づけは，「趣味のピアノ」の延長で何とかなと思っていた経験者の学生には，初学者に対し優位に立っていた気持ちを砕くものだったかもしれない。しかし，逆に初学者にとっては，はじめの一步から学んでいって良いのだという安心感に繋がったように感じられた。また，何より大きな変化は，高校の授業の延長ではなく，教員或いは保育士になるために必要な技術で，やらなければならないという自覚が芽生えたことではないだろうか。

ピアノの経験者が，レッスンを受けてきたからと言って，それが初学者よりも優位になるかということもそうとも言えない。場合によっては，その経験が新しい技術を学ぶことを妨げることもある。例として，習っていたという年数が何年であっても，楽譜を読む習慣がついて

いない。すべての音に音名の記入があった。リズムは、聞き覚えで弾くため曖昧。自分ではできていると思い込み、間違いを指摘しても直せない、或いは、違いが判らない。むくれる等があった。

レッスンを受けたことがある＝弾けるではなく、個対個の関係の中でピアノを弾いた経験があると考えようにした。その経験者に対しても、養成校で行われるピアノ実技、弾き歌いについての意識を変えることは大変有効であった。

また、少し進んでいた状態で入学してきた経験者は、後期になってから「弾き歌い」の初め数曲の伴奏が平易であることで「弾き歌い」が簡単だと思い込む学生もいた。

2. 器楽Ⅰ：前期ピアノ実技の授業目標

授業課題及び、到達目標は、指使い付バイエルピアノ教則本（全音出版）とブルグミュラーの中の指定された曲を合格すること＝確実に楽譜が読め、両手で演奏できること＝表現できること。初学者の最低到達ラインがそこで、経験者は各教員の判断で、上限をバイエル内と定めず、ブルグミュラー、ソナチネ、ソナタと進んでよいことになっている。幼稚園教諭と保育士を目指すクラス（幼保）と小学校教員を目指すクラス（小幼）の指定曲数が違うのだが、今年私が担当したクラスは幼保のクラスであった。

平成26年度に私が担当した1年生19名のうち、ピアノの初学者は10名（入学してから初めてピアノのレッスンを受けた者4名、入学が決まってからレッスンに通った者で個人レッスンに通った者5名、入学が決まってからグループレッスンに通った者1名）、どのような時期、期間であっても個人レッスン経験のある者9名であった。

以下に目標とした事柄を示す。

a. 楽譜を読むための基礎知識を覚える。

- ・拍子、リズム、音名（ト音記号、ヘ音記号）書きこまれている各記号を理解し、拍子とはとれるように、リズムは基本の音符と休符を覚え、そのリズム型が、拍子を手で打ちながらリズム唱で読めること、そして、片手で拍子、片手でリズム（足で拍子、手でリズムでも良い）が打てること。音は、ゆっくり数えながらで良いので、自力で読めること。
- ・もし集団授業で知識を得ているのならば、「知っている」だけでなく、学生が一人で、実際に「できる」ことが重要と考える。少人数のピアノ実技クラスで確認し、或いは捕捉し、個人レッスンの中で反復し確実な力にすることが大切と考えた。

b. 何を弾くか理解してから、左右の手の指がそれぞれに動くこと。指番号を覚え、楽譜に書かれている「指使い」というルールを守り、両手で弾けること。

- ・各自の手の状況（大きい小さいか）は、この時点ではまだあまり考慮せずに弾く

ことができる。⇒各人の手の大きさによって、書いてある指使いを変更しなければいけないことは、往々にして有ることである。その場合は、指使いを守らなくても良いというのではなく、自分の手の大きさだったら、どう指使いを変えていけば、その曲に悪影響なく、手に無理なく弾くことができるかの判断力を付ける。

c. 効率の良い練習方法を身に着ける。

具体的な方法として、

- ・ 拍子を取り、片手づつのリズムを読む或いは手で打つ。
- ・ そのリズムに合わせて、自分の弾くべき場所を指差しながら音名を音読する。(まだ弾かない)
- ・ 音名を音読しながら弾く。
- ・ そして、音楽としての流れができるようになるまで反復して練習する。⇒ピアノを練習する際は、30人の元気の良い子ども達の前で弾くことを想定し、しっかりと明瞭なタッチ（打鍵）で弾く。
- ・ 左手を弾きながら右手の音を音読する。また、右手を弾きながら左手の音を音読する。その後、テンポをゆっくりととりながら両手を合わせる。
- ・ どの段階でも、反復して練習する。自分が何回弾いたかではなく、最後までミスなく通して弾けるようになるまで練習する。

この3点を授業目標とした。

3. 実践方法

レッスンは、担当クラスの人数を半分に分け、半数は練習室へ、またその半数がレッスン室にいる形をとっている。1名がレッスンを受けている時に待機の学生がいるのだが、その待っている時間を無駄にさせないために、学生に「他人のレッスンも自分の勉強と考えて、自分が弾いていない曲も楽譜を見ながらメモをとる。」ことを伝えた。

また上記3点は、一朝一夕に理解をしたり、できるようになったりするものではないと考え、前期4月中の4回の授業では、1コマ90分中初めの10～15分を使ってレッスン内全体授業の形態でa. 楽譜を読むための基礎知識の確認を行い、b. c. については、個人レッスンの中で、楽譜を共に読み、各自の進度に合わせ、より具体的なアドバイスをを行った。言葉だけではなく、付箋に書き込み、そのアドバイス場所に貼る、復唱させることをした。

実技レッスン内で、みんなで受ける授業が少しでもあることで、学生同士で共通理解できる事柄ができ交流がうまれた。また、その後の個人レッスンに対し励まし合う姿が見られた。ただ残念ながら、全体授業を行うと個人のレッスン時間は短くなってしまう。その点については事前に学生に了解を得た。

初学者は、何をされるのだろうと緊張感半端なく、教員との1対1という人間関係に慣れることから必要であった。練習してないわけではないのに、緊張のあまり顔色が悪くなったり、ピアノを弾くよりも、私が言葉を発するよりも先に涙があふれたり、手が震えて鍵盤に収まらなかったりと様々なことがあった。経験者においても、緊張しない学生はいなかった。

その緊張感に少しずつ慣れてくる（＝状況を受け入れられるようになる）と、経験者よりも自分たちは遅れているという意識を推進力に換え、練習量が安定したように思う。逆に経験者は、レッスンを受けて来た、自分は〇〇の曲を弾いてきたというプライドがあることが多い。しかし、それぞれのレッスン期間にかかわらず、読譜、拍子やリズム、タッチ（打鍵）が曖昧であることが多かった。

4. 留意点

まず、毎時間、学生たちの現状を把握する事に努めた。性格やクラス内での人間関係、表情をよく観察し、学生をよく見て授業内でかける言葉を選ぶように心がけた。

1年生の初めての授業の時から、学生たちは、この授業はピアノを弾く授業だと思って受講する。確かにピアノは弾くが、この授業は、学生たちがやってきたことに対して〇×を付ける閲覧型の授業ではない。まず、その思い込みを崩すことが大切であった。初等教育課程教員と保育士として、現場に必要な知識と技術を理解して身に着ける授業であることを伝え、将来的に現場において自立し、自分の力で教育計画を立て、自信をもって「音楽」が提供できるようになることが目的で、そのはじめの一歩であることを伝えながら、授業を行っていくことを心掛けた。

また、レッスン内で言葉がけを行う際、学生たちのやってきたことに対し、その人格や努力を認めないような否定的な言葉は使わないようにした。しかし、学生本人と私の間で、大きな温度差があることがあり、レッスンが成立し難く感じた時には、否定ではなく事実の受容と意義の説明に努めた。現代の学生たちの多くは、大人数になると強気になり暴走することもあるが、個人で相対すると思いのほか幼く感じられる事が多い。その特質を踏まえ、あまり専門用語を使わず、解り易く平易な言葉を使うようにした。その上で、一番近い練習達成目標を明確にし、それを熟していくことと、その積み重ねが、学生の目指すことにつながる専門技術であることを伝えた。なるべく身近な例題を用い、まず理解でき、心をしっかりとさせるように心がけた。

5. 結果

4月の授業初めに、わずかな時間ではあったが全体授業で基本的な知識を伝え、レッスンに対する意識を、趣味のピアノの延長という意識から職に必要な技術へ転換させることは、学生の

自覚を促し、とにかく頑張ろうという姿につながったと思われる。とても有意義なことと思えた。

練習については、特に1年生の場合、短大に入学が決まった時点でアルバイトを始め、授業が始まってからも、その量を減らさず、練習しない理由をアルバイトが入っているため時間の捻出ができないと言う学生が数名いた。練習ができていなければ、先に進むこともできず、できていないという自覚があればあるほど緊張感は増し、余計に弾けなくなる。悪しき循環であった。その悪しき循環も、本人の意識が変化すると共に少なくなり、5月位には無理のない範囲でアルバイトをし、練習も安定してできるようになったと思われた。

音名の音読は、学生にとって大変な努力を要したようだった。しかし、できない、できないと言いながらも、その意味するところを理解し、毎回レッスンのたびに読む努力をしてきた学生は、現時点(平成26年度1月)で、目線は楽譜において、手元を見ずに演奏するようになった。楽譜に書かれている音と違う音を弾いてしまったときの修正が早くなった。

これは、音名を音読しながら練習することで、思いの外早い時期に、書かれている音と弾いている音が一致していることを聞きわける「音感」が、少し付いたのではないかと思われた。「音感」がついていないと、「暗譜」ではなく「暗記」をして鍵盤を見ながら弾くことになる。「音感」が少しでも身に付くことは楽譜を見てはいるが、音と同時に言葉(歌詞)を見ながら弾かなければならない「弾き歌い」が始まった時に、大変有効な力であると考えられた。

しかし、反面、1年生の前期授業評価で、「音をドレミ(音名)で読まされてつらい。」「ほかのクラスはやってないことをやらされる。」という不満が出たと教授より口頭で伺った。その時点で、私に対し「学生の能力を考えて、音名は読ませないで指導をするように。」という指導があったため、音名の音読は控えた。音読の苦勞から解放された学生は、はじめは楽になったといってホッとした様子だった。後期になりピアノ曲のレベルが上がってきた現在、両手を合わせることに大きな苦勞を伴い、覚えないと弾けないという状況になってしまった。これは暗譜をするのではなく、形を暗記して弾いているだけで、自立には結びつかないと思われる。学生の様子をよく観察し、暗記なのか暗譜なのか見定めることが必要と考えた。

中には、自分がその状況になって音名音読の大切さが解り、自主的に始めてきた男子もいた。結果、彼は片手ずつも両手も、技術的な未熟さはあっても、流れよく演奏することができるようになった。

6. 後期、ピアノ実技と弾き歌いの授業目標

a. 前期に身に着けた読譜力とピアノ演奏力の向上

曲のレベルアップに伴い、来年度の就職試験の試験曲のために備える。

b. 弾き歌いの意義

弾き歌いとはどんなものか。なぜ、弾きながら歌わなければならないのか。その必要

性はどこにあるのか理解する。

c. 弾き歌い技術と練習方法の習得

弾き歌いには、どのような知識と技術が必要で、どのような手順で練習したら、効率よく成果が出るか。

また、現場で行うときに、弾いて歌うだけでなくどのような配慮が必要か。

後期の授業では、この3点を目標とした。

7. 実践方法と留意点

a. 前期に身に着けた読譜力とピアノ演奏力の向上については、前期のピアノ実技に対する練習方法を、曲がレベルアップしているので、1回でもよいから反復練習の時間を増やしてほしいというアドバイスを行うに留めた。

初学者には、まだ弾くだけで精いっぱい、表現すること（この時点では何を表現するかというよりも、楽譜上に書いてある表情記号や強弱記号を意識して、できることにチャレンジしていくこととした。）に意識が向きにくい学生もいたが、レッスン内の言葉がけによって、意識がその記号に向くように示唆し、実際に弾いて見せたり、本人に、或いはクラスみんなで身体を動かして表現することを経験させた。音としての変化は少なくとも、意識は向けられるように努めた。

b. については、後期に入り初等教育現場、保育現場で教員や保育士によって行われる「弾き歌い」を学ぶカリキュラムとなっている。後期授業の初めに、これから学ぶ「弾き歌い」について、何のために行うのか、どんなものか、どのようなことをするのか、まず実演し、なぜこの技術が必要なのかを説明した。

学生たちは授業に対し、まだ非常に主観的で、自分にとって大変かどうかでやる気が大きく左右される。しかも「弾き歌い」のピアノ伴奏は、はじめは前期のピアノ曲より、楽譜上は音も少なく弾きやすく見えるため、「弾き歌い」を簡単なものと軽視する学生も出てくる。しかし、この「弾き歌い」という技術は、自分のためというよりは、保育技能としていずれ出会う子ども達のために必要な技術であることを伝え続けていくと、少しずつ意識が変化してきた。たとえば、「しゃぼん玉」（野口雨情／作詞、中山晋平／作曲）の作詞されたエピソードを伝え、「こんな小さな曲でも奥が深いんですね。」（1年女子）という意見があった。そこで、子ども達には、自分が学んだことをそのまま使うのではなく、自身がフィルターになって、遊びの中で、学んだことをどう生かし伝えていくか考えるとよいと伝えた。

「弾き歌い」の意義については、5領域・心身の健康に関する領域「健康」・人とかかわりに関する領域「人間関係」・身近な環境とかかわりに関する領域「環境」・言葉の獲得に関する領域「言葉」・感性と表現に関する領域「表現」にかかる技術であることを踏まえた習

得を目指した。

具体的には、呼吸や姿勢、身体を保つ「健康」、現場の教員や保育士が子ども達に常に目を向けていること、弾き歌っているときの表情や視線から感じられる「人間関係」、歌を歌う意識や状況を整えること「環境」、まだ文字に目覚めぬ子ども達に自分が歌うことで言葉を伝え、ともに歌うこと「言葉」、その歌詞（言葉）を使って何をどう表現するのか、或いはさせたいと考えるのか「表現」などがある。

学生たちが練習してきた曲を使用し、5領域につながることを、より具体的にアドバイスをした。教員側がどのような工夫をしたら、思っていることや目的が子ども達に伝わりやすくなるか、また、子ども達が歌いやすくなるか、私自身の幼稚園、保育園、児童館での歌唱指導経験を基に、その学生に理解しやすい言葉で伝えた。

c. 技術と練習方法の習得については、歌詞の日本語をはっきり発音することから始めた。脳の中では、言葉を理解する場所（主に左脳）とピアノを弾くことを指示する場所（主に右脳）が違うので、歌詞と歌とピアノ伴奏を、別に練習するのが良いと考える。いきなり最初から、弾いて歌うのではなく、まずは歌詞を音読する。絵本を読んであげるように、言葉のリズムを意識しながら、必ず声を出しながら読む。基本的に、童謡や唱歌は、言葉の区切りでプレスがあることが多い。そこを見つけながら読む。その後、ピアノを練習するが、ピアノ実技の練習は、前期に習得した方法と同様で構わない。そして、右手がメロディだった場合には、言葉をそのメロディと合わせ、歌にする。

「弾き歌い」に関しては、歌が主である。その歌をバックアップするためにピアノ伴奏がある。ピアノが弾ければ歌も歌えるということはないだろう。ピアノの実技授業では、それぞれに学んだことを、まとめバランスをとっていくことが必要ではないだろうか。

歌詞＝言葉が主であるということである。自分の声で現場の子ども達に聞こえる声量を持つこと。それには、プレス（呼吸）を歌詞の区切りでしっかり深くすることを伝えた。また、歌詞は言葉なのだから、プレスによって意味の繋がらない言葉にならないように伝えた。プレス（呼吸）に意識が向くようにするために、共に音読して言葉のリズムを理解させ、歌にしたときに実際に隣でプレスをした。

前期のピアノ実技の授業の際、基礎知識として「拍子をとる」ことを徹底し、実際拍子を声に出してとって弾き始める習慣をつけておくと、ここで、現場に出た時に子ども達へ歌いだしの声がけ（サン、ハイ 或いは どうぞ）がスムーズで、できるようになるのが早い。

今までは、ピアノが弾けるようになることが目的だったところに、言葉による歌詞が付き、主役がピアノから歌へと移行する。それを伝えることに配慮をした。

8. 結果

「弾き歌い」が学生たち自身の夢や目指す職にとって必要な技術であり、自分ができるかできないかではなく、現場で必要なのだから習得しなければならないのは理解してくれたように思う。ただ、どうしても、歌よりもピアノを弾くことに強く意識が向いてしまうことと、歌詞の発音が曖昧なことは、練習方法や直し方を伝えても、なかなか身につかなかった。声の大きさについては、カラオケでマイクを使って自己流に気持ちよく歌うことに慣れているためか、自分の声の大きさや、実際の自分の歌がどう聞こえているかよく分からないようだった。マイクを使わずに、自分の声で現場の子ども達に聞こえる音量を持つこと。それには、プレス（呼吸）を歌詞の区切りでしっかり深くすることを伝えた。また、歌詞は言葉なのだから、プレスによって意味の繋がらない言葉にならないように、呼吸に意識が向くようにし、実際に隣で一緒にプレスをすることで改善された学生もいた。

また、11月に経験した見学実習によって、意識が大きく変わり、レッスン時の態度が激変し、練習内容も大きく進歩した学生もいた。

何のために「弾き歌い」を学ぶのかという目的が、学生の目標と一致したとき、ピアノ初学者も経験者も納得して練習し、大きな成果を生むと感じられた。

9. 反省と今後の課題

今年1年間の器楽Ⅰの授業に、ただ課題が弾けるようになれば良いというだけでなく、目的意識をもって臨んだ。意識の変化を促すことは、練習や受講態度、試験結果において、大変有意義な結果を生んだと思う。

ただ、最終的に、この一年間の授業で、担当した全ての学生に変化と成長はあったものの、自立して学ぶ力や確実な読譜力が付いたか疑問に感じるがあった。

今後は、レッスンの待ち時間のより有効な使い方を探していきたいと思う。

10. おわりに

なぜ、初等教育現場、保育現場において、ピアノを弾けることが必要と考えられているのか。それは、多くの養成機関が、ピアノの実技習得のための演習授業を必修科目としていることから生じた疑問だった。

ピアノに代わって何か楽器が弾ければ良いとするのではなく、ピアノという楽器を弾けることが重要と養成機関は考えているのではないかと感じていた。

なぜか。ピアノは、その鍵盤を弾けば、平均律に調律された正確な音律が奏でられる。ドの鍵盤を弾けば、必ずドの音が鳴る。それは、音楽的に安定した音律を提供できる楽器だということだ。また、一クラス30名前後を想定して、皆で声を合わせて歌う場合、比較的不

安定なタッチ（打鍵）であっても、ある程度の音量で弾くことができ、音律が安定しているため、子ども達の歌をリードすることができる。左右両手で演奏するため、メロディと伴奏、或いは、両手で伴奏となり、ハーモニー（和声）を付けメロディを彩ることができる。楽器として、現場で使うことの価値は多いと思えた。

養成機関に入学してくる年齢の学生たちが、わずかな時間であっても教員と1対1で、未経験のことを学んでいくことで、高校生の時とは違う目的をもって学ぶ姿勢が形成されると思われた。理屈だけではなく、技術は、身体と時間を使い、繰り返し反復することによって身についていくことを経験し、弾けるようになっていく過程から、自分への評価が変化していく。あきらめず努力していけば成果が表れることを実体験していくことに、大変大きな付加価値があった。

今までの学生の中には、「楽譜なんて読めなくたって弾ければいいじゃないか。」「暗譜で弾ければいい。」「指で覚えてしまえばいい。」とレッスン中に発言し、自己流を貫こうとする者もある。楽譜が読めなければ、何を弾かなければならないかわからないだろうと思う。それを問うと、「通っているピアノ教室の先生に弾いてもらって、それを覚える。」「動画を見て覚える。」という。限界は早いだろうと思われた。行き詰ってしまうと、授業に対する根本の姿勢が間違っているにもかかわらず、弾けない理由を緊張のせいにしたり、教員のせいにしたりすることがあった。

技術や知識だけを一方的に伝えていく、或いは、グループレッスンで学生からの質問に答えるだけのレッスン、うまくその時間をこなすことだけを考えていけば授業は難なく過ぎていくと考えられる。

しかし、そこで学生の意識を変え、練習に向かわせ、現場に通用する実践力を持つプロフェッショナルとしての自立を促そうと考えたら、限られた時間の中で何ができるか、まだまだ工夫することができると思う。

<参考資料>

平成26年度器楽Ⅰ授業記録（鈴木担当クラス）

<参考文献>

藍川由美＝校訂・編 日本の唱歌 決定版 音楽之友社

藍川由美 著 日本語を歌おう 子供も大人もゲーム感覚で熱中する歌唱法

藍川メソッド カワイ出版

谷中優（監修）（保育内容）音楽表現 保育士及び幼稚園・小学校教員養成課程の為の
（株）マザーアース

初等教育課程教員及び保育士養成校におけるピアノ実技指導に関する一考察

- 村木洋子 歌唱共通教材（小学音楽）旋律の運指について―ピアノ入門者のための―
公立大学法人山梨県立大学人間福祉学部紀要2013年
- 奥千恵子 保育者養成と演奏技法―保育指導としてのピアノ技法―
四天王寺大学紀要2009年